

機織池^{はたごいけ}



ザザーツ。ドドドーツ。

青いくわの木の葉っぱが、大きな雨つぶに打たれて、いまにもやぶれそうです。

「これはたいへんな雨だぞ。また、つつみが切れるのではないかな。」

「せっかく作ったわしの畑も、またまた水かぶりになってしまふのかのう。」

新居村^{あらいむら}にある、大きな池のつつみの上で村の人たちが、青い顔をして池をながめていました。

「五年前の大雨はたいへんじゃった。つつみが切れて、この辺りは、海のようになってしまった。かつていたぶたやにわとりまで、きれいさっぱりいなく

なってしまったんじゃ。わしら、命からがら山ににげたものなあ。」

「そうじゃ、おらがうちも、食べる物がなくなつて、草までかじっていたわ。」

「今年の雨も、あのとときににているなあ。」

「どうしたらよいかのう。」

「いいちえはないか。」

ふだんこの池は、子どもたちの楽しい遊び場になっていました。村の子は、みんなこの池で、ふなをつつたり、泳いだり、じゃぶじゃぶ水をかけあつたりして遊びました。それが、大雨がふると、いっぺんに様子が変わってしまったのです。

「そうじゃ、いいことがある。」

みのかさを着けて雨に打たれていた源助^{げんすけ}じいさんが言いました。



「なんだ、なんだ。」

「早く教えてくれや。」

「まてまて、これはな。ひとつ、庄屋^{ぢやうや}さんの家にとまっていなさるうらないしさまに、きいてみよう。」

「りっぱなうらないしさまというでねえか。」

みんな、ほっとしてさんせいしました。

「これは、ただごとではないぞ。こんなにたびたび、つつみが切れるのは、池の神様がおこっているのかもしれない。この中でだれか、池にいたずらした者はいないか。」

うらないしは、白いひげをなでながら言いました。

みんな顔を見合わせてだまっています。
 「池にしようべんしたり、よれたものを投げこんだりしたことはないか。」
 「喜八。おめえ、子どものとき、しょうべんを池にしていたらう。」
 「作造。おめえだって、してたじゃねえか。」
 「芳松もしてたぞ。」
 「それにちがいない。水は、命のもとという。その水をよごせば、水の神様がおこるのはあたりまえだ。」
 「うらないしさま。何かよい方法はござりませんか。」
 「教えてくだされ。」
 「一つだけある。だが、たいへんなことだぞ。村の人に見えるかな。」
 「何でもやりますだ。」
 「できますとも。」

うらないしが言ったのは、本当にたいへんなことでした。
 「五月一日に、この池のつつみを、はたおり道具を持ったむすめが通る。そのむすめを池の中にしずめて、つつみをつくりなおせば、このつつみは二度と切れなくなるのじゃ。」
 村の人たちはびっくりしました。
 「そんなことできるものか。」
 「わしは、いやじゃ。」
 「でも、村の人全部のためには、なんとかしんでもらわねばな。」
 「そうだな。かわいい子どももいっぱいいるしな。」
 「池の守り神様になつてもらうのじゃ。」



「しいっ。来たぞ、来たぞ。」

「おお、はたおり道具を持っている。あのむすめにちがいない。」

「かわいそうだが、村のためだ。」

「わしが、足を持つから、喜八は頭のほうをかついでくれ。」

「おら、いやだ。」

「しっ。みんなでいっしょにかついでしまおう。」

カラリ、カラリ。

はたおり道具のゆれる音が通りすぎようとなりました。

「わあっ。」

もう、みんなむちゅうでとび出しました。おどろいて、声も出ないむすめをつぐと、つつみの上から池に向かって投げ下ろしました。

ドブン。

水面に大きな輪が広がって、むすめは、池の底にしずんでいきました。

むすめが持っていたはたおり道具だけが、静かにうき上がってきました。



いつの間にか、あんなにふっていた雨もやんで、雲の間から青い空がのぞいていました。

「どうぞ、池をいつまでも守ってください。」

「おまえさまのことは、いつまでも、わすれねえぞ。」

村の人たちは、手を合わせておがみしました。そして、しっかりとつつみをつくったのです。

それから、どんなに雨がふっても、つつみはびくともしません。

村の人たちは、安心して、田んぼをつくり、畑をたがやすことができました。子どもたちも、池で楽しく遊びました。



何年かたつと、むすめのことを言う人もいなくなりました。池に向かって、手を合わせることもなくなりました。

ところが、そのころから、村にふしぎなことが起こり始めました。

「新吉のうちのむすめが、五月一日に、はたおりをしたら、急に頭がくるって、あばれまわって死んだそうだよ。」

「正太のおばさま、同じだ。」

五月一日に、はたおりをすると、その人は、必ず苦しがつてあばれ、やがて死んでしまうというのです。

そのときになって、村の人たちは、池にしずんだむすめを思い出しました。

「たいへんだ。これは、あのむすめのたりにちがいない。」

「池を守ってくれている人をわすれたからだ。」

村中の人がおそれおののき、むすめのためしいをなぐさめるために、近くに寺を建てました。この寺を道浄寺どうじやうじといったそうです。

また、いつからともなく、池は、「機織はたこ池」といわれるようになりました。